紙芝居　「髙山右近」

作・手作り絵本サークル 「いろえんぴつ」

①

　皆さん、「髙山右近」という人の名前をご存じでしょうか。右近は、今からざっと４５０年ぐらい前の、戦国時代に生まれ、後の世の人々から、「悲劇のキリシタン大名」と言われています。

　なぜ、「キリシタン大名」と言われるようになったのか。また、なぜ、「悲劇の」と、形容されるようになったのか。彼の一生をたどりながらご覧いただきましょう。

②　右近の誕生

　髙山右近は、幼名は「彦五郎」と言い、１５５２年、摂津の国高山、現在の大阪府豊能町で生まれました。父は、髙山飛騨守と言いました。
　その頃、日本は、国をまとめる力が弱くなり、各地の大名が、武力にものを言わせて、すきあらば、よその国を奪い取ろうと戦争をしかけている、「戦国時代」でした。

　そんな中で、尾張の一大名、織田信長が、次第に他国を従え、天下統一の野望をむき出しにしていました。
　こういう武士たちに支配されている民衆は高い税金や、自分の食べる分もないほどの年貢米を取られ、戦いになれば、いつ家を焼かれるか分からないという不安の中で、おびえる生活をしていました。

③　ザビエル来る

　このような人々は、仏教に心のよりどころを求めました。けれども、その仏教も、「欲を持たず、死後の世界の幸せを祈れ」と教えるだけでした。そして、寺に寄付することが、あの世の幸せを約束することだと教えました。中には大名のように武器をたくわえ、大きな力を持つ寺さえ出てきました。
　そんな時に、ポルトガルの宣教師、フランシスコ・ザビエルが日本にやってきて、「万物の造物主・デウスの前では、どんな人間も平等である。」と熱心に説き、人々の悩みを聞いてくれました。

　日ごろ、武士や金持ち達に虫けらのように扱われていた人々は、驚き、喜び、信者は次第に増えていきました。
　一方、信長は、宣教者たちに、割合好意的でした。これは、キリスト教を理解したのではなく、西洋のいろいろな物が、信長の、珍しい物に対する好奇心を満足させ、鉄砲等の新型武器を彼らが紹介したためでした。

④　ロレンソの説教

　キリスト教の宣教師たちが、仏教の腐敗を激しく非難したため、方々で、「仏教とキリスト教と、どちらがよいか」という宗教論争が行われました。右近の父・高山飛騨守は、熱心な仏教信者で、「キリスト教は、間違った宗教だ。言い負かしてみせましょう。」と、宗教論争の場に出ました。外国人の宣教師たちは、日本語が十分にはわからず、論争には不利でした。

　しかし、飛騨守の相手は、「ロレンソ」という洗礼名のついた日本人で、片目は見えず、もう一方の目の視力もほとんど無く、みにくい顔かたちをしていました。しかし、いったん論争に入るや、ぐんぐんひき付け、ぜったいに負けませんでした。彼らは、三日間論争し、ついにロレンソの言葉に皆屈服しました。
この時から、高山飛騨守も熱心なキリスト教信者となり、飛騨守の長男・右近の一生を決めることにもなったのです。

⑤　沢城の礼拝堂

　右近の父・飛騨守は、周りの人々にも熱心にキリストの教えを説き、自分の領地の沢城（現在の奈良県宇陀市）を理想の地にしようと、息子と語りあいました。右近は、アルファベットやポルトガル語も勉強し、ジュスト（正義）と言う洗礼名をもらいました。

　飛驒守は、ロレンソに設計をたのみ、沢城に小さな礼拝堂を建てました。山の上の眺めのよい所にあり、花を植え、庭を美しく整えました。そこには、ジュストの若々しい声が響き渡りました。

「七つの悪に向かう七つの善は、
　一つ、驕慢を無くし謙遜の心で
　二つ、貪欲を無くし寛容の心で
　　・・・・」

　人々は、うっとりと少年・彦五郎の声を聞きました。しかし、武士社会の争いのため、親子の夢はあっけなく崩れ去り、沢城を追われることになりました

⑥　右近　高槻城主となる

　高山親子は、この後、高槻城主・和田惟政（これまさ）を頼り、高槻に移りました。惟政は、キリシタンの理解者でもあったのですが、近隣の大名との争いで命を落としてしまいます。この時、城を必死に守ったのは高山親子でした。領民は、彼らを慕いました。これをねたんだのは、和田惟政の息子で、新しく高槻城主となった惟長でした。

　惟長は、父親ほどの人物でなく、領民の信頼も無かったのです。彼が髙山親子を暗殺しようとしているという情報が入り、ついに親子は惟長と戦う羽目になりました。重傷を負いながらも右近が勝ち、周りの大名にも認められて、高槻城主となりました。右近が２１歳の時でした。
　この時から、彼は髙山右近友祥（ともなが）と名のるようになりました。

⑦　領民を愛する右近

　右近親子は、沢城で果たせなかった夢を、高槻で実現しようと、りっぱな天主堂を建て、美しい花で飾り、領民にも開放しました。それだけでなく、働き手の夫を失った女性や、孤児等に救いの手を差しのべたり、まことの心で領民に接しました。
　人が死ぬと、右近自ら棺をかついで、亡くなった人を見送ったとも言われています。

　大名といえば、領地内では絶対の力を持った人で、一般の人は近づくことも出来ない時代のことです。しかし、右近は、「領民あってこその大名。神の前では、皆同じ人間だ。」という姿勢を崩しませんでした。
　当時、高槻領内には、２０箇所あまりの教会が建てられ、２万５千人の領民のうち、１万８千人が、キリシタンとして洗礼を受けたと言われています。

⑧　秀吉、キリシタンに疑いを抱く

　織田信長は、天下統一を目前に亡くなり、豊臣秀吉が、ほぼ天下統一を果たしました。秀吉は、最初、キリシタンに理解を示していたように見えたのですが、ポルトガル船を視察していて、大きな武器を備えていることや、自国の力を自慢する宣教師の言葉に、強い疑いを抱きました。

　そして、心ひそかに、「こんな者達を受け入れていけば、日本はひとたまりもない。いつかきっと、大変なことになる。バテレンは追放じゃ。」と考えるようになったのでした。そして、「バテレン追放令」という、きつい命令を出しました。この命令は、直接的にはバテレン（宣教師）に向けたものでしたが、実質はキリシタン禁令で、特に、大名たちに棄教を求めるものでした。

⑨　右近と利休

　キリシタン禁令が出されても、右近は、キリスト教を捨てることはありませんでした。秀吉の命を受けてやってきた当時の茶道の第一人者・千利休は、右近の心情を知り、彼に手作りの羽箒（はぼうき）という、茶の道具を贈りました。右近は、茶道の世界でも、その道を極めた人だったのです。右近は、この羽ぼうきを、生涯の宝物にしました。

　右近は、この後、淡路島や小豆島などに身をひそめ、転々とする生活でした。しかし、秀吉のゆるしが出て、加賀（石川県）の前田家にお預けの身となりました。お預けとは、監視されて生きるということなのです。しかし、前田利家は、彼の人柄を信頼し、家臣の扱いをし、右近もよくこれにこたえて、築城や戦奉行の面で力を発揮しました。そして、北陸の地で、少しずつキリシタンの信者も増やし、茶の道にも励む毎日でした。

⑩　二十六聖人の殉教

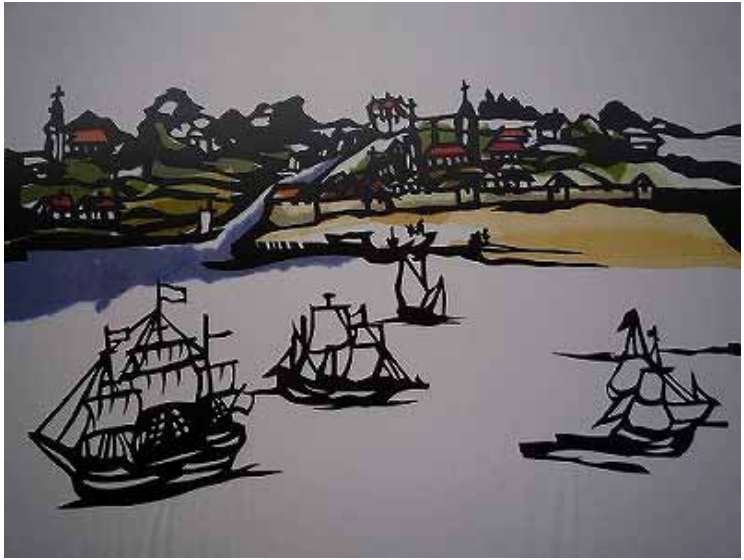
　１５９６年、右近が前田家に預けられてから８年後のことです。イスパニアの商船サン・フェリーペ号が、土佐（高知県）の浦戸に流れ着きました。秀吉は、食物を与え船を修繕させる代わりに、積荷を取り上げました。船長は、積み荷を返してくれと言い、「イスパニアは、世界で各地に領土を持つ国。戦争になったら、日本などひとたまりもないぞ。」と脅しました。

　なぜ、世界各地に領土があるのかと聞かれて、「まず、宣教師が入って住民を手なずけ、言うことを聞かなければ、それからは武力で支配してしまうのさ。」と、とんでもない答えをしたといいます。この答えが秀吉を激怒させ、イスパニア系の「フランシスコ会」の宣教師６名と、日本人信者２０名が、はりつけの刑になりました。これを「二十六聖人の殉教」と言います。

⑪　再び大禁教の嵐

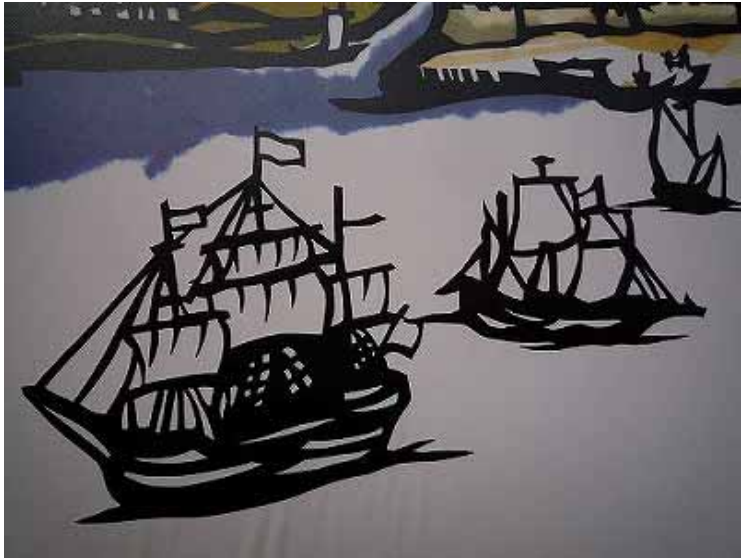
　１５９８年、さしもの権力を誇った豊臣秀吉も病で死に、その翌年（１５９９年）、右近の主君・前田利家も亡くなりました。
　１６００年、関が原の戦いの勝利で徳川家康が天下を統一、長い徳川時代が始まることとなります。まだこの頃は、キリシタン弾圧もなく、信者の数も増えていました。
　しかし、キリスト教信者の、死をも恐れぬ信仰の力に対する恐れや、旧勢力の豊臣家と信者が結び付く恐れ等から、１６１４年、再び大禁教の命令が出ました。家康の弾圧の仕方は厳しく、徹底していました。

　右近は、このままでは大恩を受けた前田家に迷惑をかけると考え、命令に従い、最後まで右近と行動を共にしたいという人たちと共に、北風が肌をさす吹雪の中、追放の道を歩いていきました。



⑫　マニラ港

　右近達は、何日も歩き、旅をし、命じられた目的地、長崎へ着きました。あの、二十六聖人のように、ここで殉教の日を迎えるものと覚悟していました。しかし、幕府の命令は「国外追放」でした。
　１６１４年１１月、彼らは小型の老朽船にすしづめにされて、出航。暑い、苦しい船の中、死ぬ人が何人も出てきました。そして、１か月もかかって、ようやくフィリピンのマニラに着きました。



　キリスト教の地、マニラでは、権力に屈することなく信仰を守った人として、「ジュスト・ウコンドノ」の名は知れ渡っており、右近一行が到着するや、マニラ総督以下、市民たちも大歓迎してくれました。
　右近は、「私は罪を得て流された身。このような歓迎を受けて恐縮です。」と礼を述べました。

⑬　右近　召天

　右近の身体は、金沢からの過酷な追放の旅で弱り切っていました。マニラに到着して、やっと安住の地を得たと思う間もなく、４０日ほどして重い熱病にかかり、２週間後に、天に召されていきました。１６１５年２月３日。６３歳の生涯でした。

　マニラ市民は、盛大な葬儀をして、右近の死を悼み、別れを告げました。マニラの人たちは、巨大な権力にも屈せず、信仰を貫いた聖人の姿をそこに見ていたのでしょう。
　この後、日本では、キリスト教禁教の嵐がますます吹き荒れ、徳川幕府が倒れて鎖国が解かれるまでの約２５０年間、信仰や思想の自由はなかったと言えるのです。

⑭　右近像

　右近の終焉（しゅうえん）の地、マニラには、比日友好公園・ディラオ広場に、「髙山右近像」が建てられています。高槻城跡公園や高岡古城公園などに建てられているものと同じ右近像です。
　髙山右近。
　彼は、権力絶対の、精神の自由のない時代に生きながらも、「人間は、皆同じだ。」という、人としてのあるべき道を、キリスト教や茶道に求めました。

　隣り人を思いやり、おごることなく、暖かい人柄でありながら、自らの信じる道については、命を懸けて志を貫いた、愛と意志の人と言えるでしょう。

　この高槻の地に、キリストの愛をもとにして、福祉の行き届いた、思いやりに満ちた理想郷を築こうと努力した髙山右近の名を、私たち高槻市民は、いつまでも語り継いでいきたいと思います。